



工場内の湿度や糸のテンションを一定に保って糸を巻き替える繊細な作業

Topic_14 試作開発のみ

シルク製の高付加価値製品を開発し、海外販路拡大へ 後継者不足に悩む“尾州織物産地”の活性化にも貢献

野口株式会社

ウールだけでなく、年間を通じて 生産できる生地開発へ

野口は尾州織物産地の愛知県稲沢市で昭和24年から続く老舗の織物商社。創業当時は織機工場も営んでいたが、現在は主にウールやレーヨンなどを使用した婦人服の服地の卸販売と、売上高全体の約15%の規模で織物設計と委託工場での生産を請け負う。社員5人という小さな会社だが、委託工場が得意とする二重織りの技術を生かした独自の生地開発も手がける。

尾州織物産地は明治時代にウール素材を全国に先駆けて採用し、生産量は国内1位を誇る。しかし、海外製の安価な製品の流入や後継者不足が原因で、産地の規模は縮小傾向にある。また、ウールの服地は秋冬の季節性が強いいため春夏向けの商品を作りにくく、繁忙期は毎年5—8月に集中する。年間を通じて安定的な仕事が無いため後継者不足も深刻で、現役の職人たちの年齢も50—70代が大半を占める。

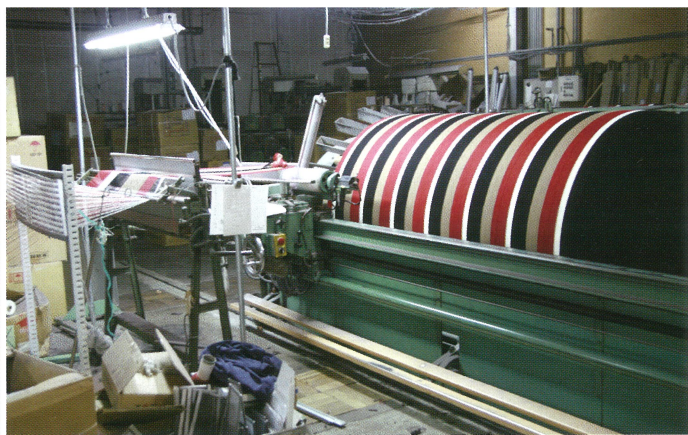
同社では秋冬以外の素材で生地を生産できないかと考え、既に5年前にも麻糸を使用した生地生産に挑戦したことがあ

る。しかし、大手生地メーカーの安価な製品の多い市場への参入は難しく、本格的な生産を見送った経験もあるという。

素材本来の艶や風合いを引き出す、 極細のシルクへの挑戦

そんな中、同社が加盟する津島毛織物工業組合が平成23年と同24年に出席した中国の展示会に生地見本を出品したのをきっかけに、欧米向けにも高付加価値製品を販売する必要性を認識し始めた。春夏でも使え、海外でも販売できるような付加価値の高い素材として、生産管理部の津坂昭仁氏はシルクに目を付けた。「シルクを使って、他社には真似できない付加価値の高い生地を作れば販路を拡大できるのではないかと考え、ものづくり中小企業・小規模事業者試作開発等支援補助金（ものづくり補助金）を利用して織物の開発に着手することにした。

既に同社では、シルクの生糸にできない短い繊維を紡績した絹紡糸は使用経験があったが、繊維の長いフィラメント状の生糸を使用するのは初めて。まずは「シルクの生糸を使用して生地見本を試織し、製織のノウハウを蓄積する」



永年のノウハウを凝縮した「極細生糸」「高密度」「二重織り」を併せ持つ世界に存在しない幻の織物の開発

野口株式会社

所在地 : 愛知県稲沢市平和町 下三宅郷内179
設立年月 : 昭和24年7月
資本金 : 2800万円

従業員 : 5人
TEL : (0567) 46-0531
FAX : (0567) 46-0875
URL : <http://noguchi-co.jp>

1	2
3	4

- 1 卸販売を手がける生地サンプラー一覧の一部
- 2 織機に糸巻きを設置するために糸を長い糸巻きに巻き替える整経の工程
- 3 「実践を通じてシルクの特徴を理解し、ノウハウを蓄積できた」と語る生産管理部の津坂昭仁氏
- 4 ものづくり補助金を活用して仕入れたシルクの糸の一部

ことを目的に開発を開始した。

生地の規格は、シルクの艶や風合いを最大限引き出すために糸番手100番の細い糸を使用して高密度で設計。「極細生糸」と「高密度」、「二重織り」の三つの特徴を生地製織の基本方針として、シルクの柔らかさを表現することにした。

仕入れ先と連携しながらノウハウを蓄積する

二重織りとは、経糸と緯糸が表面と裏面のそれぞれに出るように設計し、2枚の生地を重ねたように織る特殊な織り方。生地に厚みが出るためスーツやボトム用の生地として使われることが多い。津坂氏は、柔らかくなめらかなシルクとの相性もいいと考え、委託工場の協力を得ながら製織に取りかかった。

しかし、いざ使ってみると生糸は伸びが少なく、糸を巻くにもテンションを一定に保てず緩みが出たり、さらに糸が細いため製織時に切れたりするトラブルが多かった。津坂氏は「生糸の仕入れ先からアドバイスを受けながら製織したが、かなり苦戦した」と振り返る。それでも「織機にかけるまでの前準備段階の要となる、工場内の湿度管理や糸のテンションのかけ方などのノウハウはかなり蓄積できた」と実感。製織し

た見本は、シルクの生糸の二重織りの生地や、ウールの94番双糸を使った生地など全7種類にのぼる。

新素材への挑戦をきっかけに、産地の活性化を目指す

今後はのり抜きや乾燥など、生地見本の最終的な仕上げ加工を行う方針。シルクの風合いを生かすために柔らかく仕上げる予定だ。仕上げ加工でも、繊細なシルクに傷がつかないような技術が必要になるため、今後の課題は、ノウハウが足りないことによる不良品発生や材料のロスの低減と、製織効率が悪い部分を改善していくこと。原材料の仕入れ先とも協力して技術の向上に努める予定だ。

シルク素材への挑戦は、「原材料自体がウールと比べて非常に高額」（津坂昭仁氏）なため、構想はあっても同社単独ではチャレンジできなかったという。ものづくり補助金を活用することで、「知識として頭で分かっていたシルクの特徴が、実践を通じてよく理解できてノウハウの蓄積につながった」と語る津坂氏。後継者不足に悩まされる尾州織物産地の活性化の一助となるよう、技術に磨きをかける方針だ。